

平成 30 年度

日本共産党・あおぞら豊岡市会議員団視察報告書

- 視察日 31 年 1 月 30 日～31 日
- 視察先 岡山県美作市及び真庭市

◎岡山県美作市

＜空家及び定住対策について＞

- 岡山県美作市は岡山県の北東部にあり兵庫県と鳥取県に接している。平成 17 年に 6 町村が合併し人口は 33,989 人（高齢化率 32.54%）であったが、平成 29 年 1 月現在 27,752 人（同 9.1%）で 5,514 人（16.22%）の減少となっている。岡山県はほとんどの地域で人口減少は著しく、それぞれが地域の特徴や「移住しよう、移住したい」と思わせるような独自の取り組みをしている。

美作市のほぼ中心地に位置する湯郷温泉は、湯原、奥津と合わせ美作三湯として岡山県を代表する温泉郷である。

剣聖宮本武蔵、少林寺拳法創始者宗道臣の生誕地をはじめ F1 サーキット場、女子サッカーチーム岡山湯郷 Belle のホームグラウンドなどがあり、観光客も多く訪れている。また、旧因幡街道大原宿古町の町並みは岡山県から「町並み保存地区」に指定されている。

今回、同市が積極的に取り組んでいる移住者の受け入れ政策と成功事例、空家対策及び移住定住促進について視察を行った。

○ 視察内容

1. 移住定住促進事業

① 定住促進事業

- ・ H22 年美作市空き家情報バンク制度

定住人口の増加と地域の活性化を図るため、岡山県空家情報流通システムを利用し、市内の空き家について情報提供から入居決定までの支援を行う「美作市空き家情報バンク制度」などを整備している。

H23 に美作市お試し住宅貸付事業を開始し。対象家屋は H23 年に 2 棟、H24 年に 1 棟改修し、H24 年から受け入れを開始している。

H24 年美作市移住定住促進補助金を開始し、さらに H27 年同制度を充実している。

- ・ お試し住宅

美作市のお試し住宅は、市内に点在する空き家で比較的しっかりし

た建物を選び、市が整備して希望者に貸し付ける制度である。まず、所有者と市が10年間の賃貸契約を結ぶ。賃貸料は持ち主の固定資産税額としこれを免除。市はこの空き家を500万円（内県補助金3分の1）かけ改修する。市はお試し住宅のある地域自治会を指定管理者としているが管理料は無料だが、住宅利用者の家賃（月額2～3万円）が管理料として、区に入る。区はお試し住宅を管理し、いつでも入居できるように住宅を管理するというものであった。視察したときは空き家になっていたが、家屋も庭も管理が行き届いており。すぐにでも住む事が出来る状態であった。



## ② 空き家情報バンク制度

県外の固定資産税納付者に、PRカードを同封して空き家情報を収集し、お試し住宅制度など紹介している。当初は数件であった空き家が、H28年度までに31件登録されている。（移住定住補助金・新築奨励金交付額の実績一覧後記参照）

## ③ スポーツ振興

美作市はスポーツ振興を市民のみならず、移住定住者に選ばれる施策として振興している。美作市総合運動公園には5,000人収容の広大なグラウンドがある。女子サッカー支援は有名で、「なでしこジャパン」の主将を務めた「みやま選手」は美作市で生活し練習に励んでいた。

## ④ 地域おこし協力隊

美作市は多くの地域おこし協力隊を受け入れ、この隊員の中から定住者が生まれ、定住者が仲間を呼びそれが広がるという前向きな展開を見せている。

今回、時間の関係上訪問できなかったが「上山地域」はその典型とし

て有名である。

上山地域はかつて8,300枚100町歩の棚田があり、そばにおよそ1,000人が暮らしていた。しかし時代と共に棚田を取り巻く環境は変わり、手放され放棄されていった。

そこで、この巨大な荒れた棚田を再生しようと地域おこし協力隊が動いた。仲間が仲間を呼び真剣な若者達の行動力が、かつての棚田の復興に繋がって行ったという。

狭い地域の農業は大変な労力を必要とするが、お互いが助け合い、知恵をだし機械化も進んでいるという。多くの若者が新しい生き方を見つけ、その発展は大きく広がっている。棚田を見学する人も後を絶たない。

## 2.ジビエの取組

- ① 鳥獣による農作物の被害が年々拡大しており、被害防止を目的としたイノシシ及びシカの捕獲は平成26年度には年間5,000頭を越えた。捕獲獣の処理については一部の自家消費分を除いて埋却等により廃棄していたが、シカ、イノシシの多くは死骸を放置することもあり環境面の悪化が問題となっていた。

市はこれらの問題解決と活用について研究し、国の補助事業を取り入れ、獣肉処理施設の整備に取り組んだ。その結果捕獲獣を獣肉として処理し販売することで、一層の捕獲促進による農作物の被害低減と、新たな地域資源としての有効活用を図っている。

事業の詳細は別添資料に詳しいが、豊岡市でも年間6,500頭を越す鹿の捕獲、処理が行われており、これの有効活用を図りたいとの声が上がっている。ジビエだけでなく、皮を利用した製品も作成されており調査研究が求められる。この声に応え、有効活用を検討する必要があるのではと改めて感じたところである。

## 2. 岡山県真庭市

### 《バイオマス発電事業》

- ① 岡山県真庭市は平成17年3月31日に、真庭郡勝山町、落合町、湯原町、久世町、美甘町、川上村、八束村、中和村及び上房郡北房町の9町村が合併して誕生し人口は4万6千人。岡山県北部で中国山地のほぼ中央に位置した、総面積828km<sup>2</sup>で、岡山県の約11.6%を占める県下で最も広く大きな自治体である。

良質なスギ・ヒノキを算出する林業は、古くからこの地域を支えている。現在も多くの伐採事業者や木材加工会社、市場などが操業しており、真庭市

の象徴である木質バイオマス産業の中心地になっている。

今回の視察は、合成材を製造し、海外輸出も行う製造から発生するおがくずや端材などを活用してペレット製造販売している株式会社銘建工業を中心とする「バイオマス発電所」の現状と市との関わりを学ぶ視察であった。

## ②「バイオマス発電所」

- ・株主 真庭市、銘建工業、真庭森林組合、木材市場など 10 団体
- ・創立 10 団体の出資により、平成 25 年 2 月 「真庭バイオマス発電所株式会社」平成 27 年 4 月運転開始 総事業費 41 億円
- ・燃料 間伐材など未利用材、端材、剪定枝材など年間 148 千トン、  
(石油石炭などの助燃材は一切使用しない)
- ・発電量 10,000KW 一般家庭の 22,000 世帯分
- ・販売先 新電力会社 3 社、地元の中国電力には販売していない
- ・雇用 発電所 15 人、間接雇用 180 人で地域に貢献している

市の目標は、「バイオマス産業都市真庭」の実現に向け、今後のプロジェクト事業として

- ・真庭バイオマス発電事業
- ・木質バイオマスファイナリー事業
- ・有機廃棄物資源化事業
- ・産業観光拡大事業

以上をあげている。

## ② 木質バイオマス発電

バイオマスとは間伐材やおが屑、建築廃材、畜産糞尿、家庭ごみなど生物起源のエネルギー資源の総称。バイオマス発電はバイオマスを直接燃焼し、発生する熱を利用して蒸気でタービンを廻し発電する。

真庭バイオマス発電株式会社は上記のように 22,000 世帯分の電気を発電しており、クリーンな環境を保っている。広大な山林を守りつつ成果物としての電気を利用するあり方は、大いに学ぶ必要を感じた。



### 3. 視察を終えて

#### ① 美作市

人口減、空き家対策など、全国的な課題になっている。じりじりと人が居なくなる、空き家が増え、さらに老朽化が進み、廃屋と化する現実を誰もが心配し将来を憂う。何とかしないと大変なことになる。

ただ大変革は一気に起こるものではなく、気の長い地道な取り組みを続けて行かざるを得ないと思われる。

今回の視察は、人口減少を一気に止め、発展を続けているというものでなかった。しかしながらその町なりに最善の努力と確信を持って政策を展開していることに大いに刺激を受けた。

美作市では合併前の旧町村単位で独自の取組と、全体での共通の課題を目標に掲げて取り組まれているように感じた。

中でも<sup>あだ</sup>英田地区上山集落では、かつて8,300枚（100町歩）あった棚田を移住者が中心に棚田再生に取り組み、それを活かした農法を確立しつつある。未経験の若者が、しかも条件が悪く放棄された田を逆手に取って美田に造り替える。大変な苦役を求められながら、それを楽しんで造り替えていることは感動以外にない。

空き家が増え、老朽化が進み廃屋と化した家がぼつぼつと増えている中で、市が手を入れた空き家をいつでも住むことが出来るように管理し、入居者がその温かさを実感する。これまで経験したことのないような、現実起こっている事実を感じ取る移住者が、この町に住もう、暮らそうと決意し、空き家を買取る。また新しい家を建てるといった動きは地域住民に感動を与え自信さえ持たれている。

こういった心のこもった政策が少しずつではあっても浸透していくことが村を守り地域を残していくことに繋がっているのだと思った。

また、スポーツ振興をまちづくりに生かす取り組みも良い政策である。



## ② 真庭市

化石燃料の活用が主流の現在ではあるが、クリーンエネルギーに切り替える取り組みは全国的に始まっている。

自然エネルギーとは、風力、太陽光、水力、バイオマスなどの環境にやさしいエネルギーだ。発電時にCO<sub>2</sub>を排出しないため、自然エネルギーの普及は、地球温暖化防止につながる。

また、自然エネルギーは化石燃料の代替エネルギーとしても期待されている。

真庭市は木質バイオマス発電によって、一大プロジェクトを構築し、豊富な山林資源、間伐材やおが屑、建築廃材などを利用して発電し電気を売却している。理想的なリサイクル活動である。真庭市はこのバイオマス発電をさらに進めていく方向である。真庭市での成功が今後全国に広まるかもしれない。

## ③ 豊岡市の「豊岡市バイオマスタウン構想」

豊岡市は、2007年3月に「豊岡市バイオマスタウン構想」を策定した。そこには、豊岡市内の約80%を占める豊かな森林とその間に広がる農地、中央を流れる円山川など、豊かで個性的な資源を保全、再生、利活用することで、循環型社会の実現や産業の活性化による地域振興を図ることを目指すとある。その中心的な事業が、豊岡ペレットを製造し、販売する取り組みであった。しかし生産されたペレットは燃えにくい、火力が弱いなどの理由で販売量は年々減少し、そのためこれまでの累積赤字は2,300万円に達している。

今回、ペレットの製造を中止し、木質チップ製造に切り替え、山積みされた原木と合わせ「朝来バイオマス発電所」に売却する方向に転換することが示された。

原因はペレットを製造販売してきた豊岡ペレット株式会社の業績が悪く、赤字が続いた。そのためペレット製造から木質チップ製造に切り替えることで年間約400万円の黒字が見込めるといふ。経営的観点から言えば、利益を産む方向に転換することもやぶさかではないが、「豊岡バイオマスタウン構想」の理念からすれば、ペレットの製造と合わせ木質チップ製造を進めるべきではないかと考える。なぜなら、ペレット製造装置及びボイラー6基、ストーブ約400台の整備におよそ6億7千万円を投入しており、これを活かす責任がある。

真庭市の成功事例を十分研究し、バイオマスの活用について再考することをあえて苦言しておく。